

# 隣の国と考古学 2 : 韓国

阿子島 香

## [読む館長講座⑥]

東北歴史博物館館長講座概要

2023年11月25日

「東北グローバル考古学 part3—いにしえから、今を考える—」⑥

### はじめに

今年度の館長講座は、宮城県・東北地方と世界の遺跡を比較文化的に捉えて、「温故知新」すなわち現代への意義を探ります。昨年度・一昨年度の講座に引き続いて、「人間とは何か」を大きなテーマに考えていきます。また、令和3年度、令和4年度とも、各回の講座のあとに、改めて補足加筆を行ないまして、エッセイの形「読む館長講座」に再構成しました。そして、両年度分ともに、当博物館のHP上に、PDFファイルの形で公開しております。どなたでも、自由に無料ダウンロードできますので、どうぞご活用ください。

令和3年度は、人類の誕生から、日本列島へのホモ・サピエンスの渡来、そして縄文時代に至る道まで、「時代を追って」考えてみました。令和4年度は、毎回テーマを変えて、人類史の歩みから「時代を通して」考えてみました。今年度は、歴史から現在にむかって「時代を超えて」考えます。当館長の独自の視点を含めて探ります。

(初めてのお客さまに。ここまで一部再掲です。また東北歴史博物館講堂にて、お待ちしております。)

### 「近くて遠い国」?

今回も「隣の国と考古学」という題ですが、相手国との共同研究の実際を紹介することを通じて、どのような意義があり、また難しい点があるのか、考えてみます。今回は2:韓国です。前回は1:サハリンでした。いずれの地も、国境となる海を隔てて、すぐ向こう側ですが、日本との関係では、不幸な時代もありました。私は多くの国と研究交流を行なってきましたが、ここでは非常に複雑な歴史的関係がある場所を取り上げます。大日本帝国が旧植民地支配を行なった国(今回)、また一時日本領の土地だった場所でした(前回)。相互の国民感情も複雑で、いずれも「近くて遠い国」と表現されたりもします。過去には、当時の日本の学者たちの研究もありました。遺跡は同じ場所に存在し続け、出土品も歴史的な背景の中で収蔵研究されてきました。国境を越えての協力関係によって、一つの国の考古学(「一國考古学」)を超える成果を得ることができます。「比較考古学」の意義です。その一方で、

両国の歴史が、いろいろな所に影を落とします。双方にとって、「歴史認識」には、現実にかんがりの違いがあります。

## 永遠の隣人

講座の副題は（「永遠の隣人」という歴史認識を持って、共に石器を研究する）としました。歴史的事実の一つであったとしても、歴史をどのように捉えていくか、評価していくかには、相互に大きな相違があります。歴史認識が共有されているわけではありません。そもそも歴史的事実をめぐる相互批判も絶えることなく、まさに諸説ありますという状況は、どの時代の両国関係についてもさまざまです。

一方で、両国それぞれの内部での政治的な立場や考え方にも大きな幅があって、歴史認識を一層、複雑なものとしています。また一方では、両国関係が最悪とまで言われた数年前でも、草の根的な交流は脈々と続いていましたし、文化や芸術の面では、互いに人気は衰えず、密接です。K-POP、韓流ドラマ、グルメブーム、逆もまたあります。本日の講座では、旧石器考古学と、博物館学（歴史博物館）から取り上げて、少し考えてみたいと思います。結論を急がず、相手を非難したくなる気持ちを抑え（双方向です）、どうして私たちはそのように感情を持つのだろうか、と考えてみましょう。学校の教科書の記述さえも、大きく異なる両国です。大きな歴史的事件は、違う名称で呼ばれています。しかし、歴史的な深い縁は、決して切れることはあり得ない「永遠の隣人」としての両国なのです。各人が隣の国をどう思うか、あるいは好き嫌いというスケールではどうか、それぞれの思いに関わらず、将来ともに両国は、隣にあって存在し続けます。

## 旧石器時代の事例から

数万年前の狩猟採集民の世界であった旧石器時代から、のちに両国となる土地の間には、相互関係がありました。4万年前を遡る前・中期旧石器時代に、韓国の地ではハンドアックスを伴う文化が発達していました。両面加工石器の技術的特徴や、大型と小型の石器の組み合わせで構成される型式組成などは、日本の同じ頃の文化とも共通点を持っていました（大分県早水台遺跡など）。

約4万年前には、ホモ・サピエンスの到来と共に、韓半島（朝鮮半島）で石刃技術を基盤にする文化が始まり、スンベチルゲ（有茎の刺突具）が発達します。忠清北道の丹陽に所在するスヤング遺跡が代表的です。スヤング遺跡第VI地区第4文化層の石器使用痕を分析する共同研究を行ないました。清州市にある「韓国先史文化研究院」（李隆助理事長、禹鍾允院長）との学術交流の実際をご紹介します。使用痕分析には各種の方法があり、東北大学チームは長年これに取り組んできました。高倍率、中倍率、低倍率の手法を総合することで、スンベチルゲ（抉りの入った石槍状の形）の実際の使い方を解明することができました。両国研究者の協力の成果です。

スンベチルゲは、3万年前以降に、九州を中心に流入してきたことが研究されてきました。

しかし、東北地方の石刃を基盤にするナイフ形石器の文化の中にも、この器種が存在することが指摘されます。南部の光州市にある朝鮮大学の李起吉教授との共同研究の成果です。後期旧石器時代の後半にも、**細石刃文化**の共通性など、日本列島と韓半島との関係は密接で、むしろ東アジア的交流として考えるべきものです。

### 稲作農耕と前方後円墳

日本列島の初期農耕社会である弥生文化は、まず九州北部に韓半島から入ってきました。相当の移民集団も推定されています。稲作農耕文化は、それから西日本、東日本へと拡大しました。弥生時代から古墳時代にかけて、実に多くの技術や文物が、韓半島経由で入ってきました。逆に、日本列島から韓半島に伝わったものとして、古墳時代の中期後半から後期にかけての前方後円墳の築造がありました。韓半島の南西部に十数基の分布が確認されています。その後の日本古代史でも、渡来人の活躍に顕著なものがあることは、皆さん周知のことと思います。

### 安重根義士記念館

近代・現代に至るまで、両国関係はさまざまな状況で推移しましたが、「歴史認識」にも大きな差異が存在します。現代の博物館から事例を取り上げてみます。ソウルの中心部、南山公園に「安重根義士記念館」があります。アン・ジュングン氏は、独立運動の志士で、1909年10月26日に、当時の初代韓国統監であった伊藤博文氏を、中国ハルビン駅で暗殺しました。大日本帝国が大韓帝国を併合（1910）する直前のことでした。韓国では、この事件は「義挙」として高く評価する歴史観が一般的で、博物館展示にも良く表現されています。講座では、実際に記念館を訪問した際のスライド多数で、両国民の「歴史認識」についても考えてみました。

以上、当日配布のレジュメに従って、講演の要旨を述べました。以下に、いくつかのトピックを改めて取り上げて、少し詳しくご説明したいと思います。

### スンベチルゲという石器

スンベチルゲという聞きなれない名前の石器が、今回の大きなテーマです。後期旧石器時代の石器で、韓国語では、「ナカゴ（茎）を有する刺すための道具」といった名称です。英語では、**Tanged Point** と訳されて、国際的には「有茎尖頭器」という名称になります。日本考古学と韓国考古学は、非常に長く深い交流の歴史を持っています。特に、古墳時代や飛鳥時代（日本）と三国時代（韓国）、古代律令制の時代（奈良時代の渡来人が日本古代文化に与えた影響）については、皆さんも多くの話題を聞いたことがあると思います。

旧石器時代に関しては、約3万年前の南九州の始良カルデラの大噴火に続いて、韓国で盛んに製作されていたスンベチルゲに類似する石器が、九州島に広まる現象が注目を集めてきました。多くの研究が韓半島と九州島との関連について行われてきました。同種の石器

なのですが、日本考古学では「剥片尖頭器」という器種の名称が使われて、研究が進められてきました。また日本考古学での総称的な石器の器種名称に「ナイフ形石器」があります。素材の剥片や石刃に、一部分の縁辺に調整加工を施した道具を、まとめてこのように分類してきました。別に現代のナイフのような使い方をした石器という意味ではありません。

### 日本と韓国のスンベチルゲの比較

東北地方にも、ナイフ形石器はたくさん出土しています。その中に、韓国で言うスンベチルゲに類似する石器があるのではないかという視点で、比較研究を進められたのが、李起吉（リ・ギキル）、朝鮮大学校教授です（仙台とは姉妹都市の、光州広域市にある総合大学です）。東北大学総合学術博物館の客員教授として、2012年9月～2013年2月の間、仙台の私たちの研究室（文学研究科考古学研究室）で、山形県などの出土石器を研究されました。この滞在は、同博物館の柳田俊雄教授（当時）の御尽力で可能となったものです。李教授は、いくつもの遺跡からスンベチルゲに類似する石器を見出して、製作技法、型式、大きさ、年代の各方面から考察を行ない、総合学術博物館の紀要に発表されています（李起吉 2014）。この雑誌は、東北大学附属図書館のHPから入れる「機関リポジトリ」で、どなたでもダウンロードしてご覧になれますので、どうぞご利用ください。

李教授は、韓半島南部の**湖南地域**で20年以上にわたって旧石器時代の遺跡を次々に発掘調査、研究されてきました。その中には**ジングヌル遺跡**のように、多数のスンベチルゲを出土した遺跡もあります。氏は日本考古学でのナイフ形石器、また韓国考古学での広義のスンベチルゲが**多様な型式を含む**ことを指摘されて、その中から両側の基部が凹んでいる形態の石器に特に着目して、両国での型式学的な比較を行ないました。これまで九州島を中心に考えられてきた両国のこの時代の関係は、もっと広大な交流があったことを、東北地方で見出したスンベチルゲの事例をあげて論じました。後期旧石器時代の前半に遡ることをも指摘されました。会津若松市**笹山原 No.16 遺跡**では、 $32,190 \pm 140\text{BP}$ と年代測定された古い事例もあります。郡山女子短大の会田容弘教授の発掘調査によります。（講座では、スライドの図で説明しました）。

### 石器の使用痕分析で協力

私の韓国考古学との協力で、最も特筆されるのは、忠清北道の清州市にある韓国先史文化研究院（Institute of Korean Prehistory, IKP）の研究者たちとの交流です。講座では、多くのスライドを用いて、詳しくご紹介しました。特に、旧石器の使用痕分析を、共同研究として実施できたことがあります。なお、使用痕分析の原理、方法と研究の歴史は、今年の館長講座で解説をしましたので、繰り返しを避けます。詳しくは、「読む館長講座」令和4年度第5回「**石器の使い方を科学する**」をご参照ください。

2017年からのIKPとの共同研究では、ホモ・サピエンスに特有の行動原理が、スンベチルゲの石器製作と使用の実際の中に見て取れることを明らかにすることができました。ス

ヤング遺跡第VI地区第4文化層等を残した新人たちは、将来の時間経過を見通して、計画的に行動を行なう人々であったことを知ることができました。大きな成果と考えています。その後にもなくして、新人たちは日本列島にやってきたのでした。両国の間の先史文化に共通性があるという見方よりも、**地球上で唯一の同じ種**としてのホモ・サピエンスの行動という視点で、約4～3万年まえの世界を考えていきましょう。

講座では、同研究院の理事長である李隆助先生、院長である禹鍾允先生、研究員の多くの調査員の皆さんとの緊密な交流について、「隣の国と考古学した」経験として、多くのスライドでご紹介をしました。上述のスヤング遺跡は、韓半島にホモ・サピエンスが到達した頃の文化層が調査されています。古さ4万年以上という実年代が得られている文化層の石器について解説しました。使用痕分析によって、人類集団の行動の一端を解明できたことを解説しました。詳細は、「読む館長講座」令和4年度第6回「**現代人的行動の起源**」をご参照ください（当館HPで、クリック一発でPDFが出ます）。今回は、両国の研究者どうしの密接な交流という視点から、改めて考えてみました。

## コロナ禍が来た

2020年早春には、続いての新たな共同研究を具体的に進める予定でした。しかし、ここでコロナ禍がやってきて、全体は中止、先が知れない延期となってしまいました。その間に、韓国国内では、スヤング遺跡の重要な出土品は、国家帰属の手続きが進み、清州国立博物館に移管、収蔵されました。公式報告書は2018年にIKPから刊行されています（私たちは英語で寄稿）。国立博物館の収蔵資料の研究は非常に制限が多く、困難となってしまいました。コロナ禍のためとはいえ、極めて残念な気持ちが収まりません。スンベチルゲ96点中、13点を試行分析したところでした。（成果については、『東北歴史博物館研究紀要』23（2022）をご覧くださいければ幸甚です。当館HPでも公開。）

## 菩薩半跏思惟像

古代日本（古墳時代、飛鳥時代）と古代朝鮮（三国時代）との緊密な関係はよく知られているところです。象徴的な写真を見てみましょう。東京国立博物館HPからです。2016年6～7月に、「日韓国交正常化50周年記念展」として、韓国国立中央博物館から、東京国立博物館に巡回しました。日本の国宝、菩薩半跏思惟像（伝如意輪観音像）、奈良中宮寺門跡蔵、木造（クスノキ）、飛鳥時代（7世紀）と、韓国の国宝78号、菩薩半跏思惟像、国立中央博物館蔵、三国時代（6世紀後半）、を共に鑑賞できる展示ということでした。私は残念にもこの機会を逸したのですが、前者は宮城県美術館、後者はソウルの中央博物館で鑑賞できました。辞書的には、半跏思惟（はんかしゆい）とは、台座に腰掛けて左足を下げ、右足先を左大腿部にのせて足を組み（半跏）、折り曲げた右膝頭の上に右肘をつき、右手の指先を軽く右頬にふれて思索する（思惟）姿のお像です。古代日本でもいくつも残っています。京都太秦の広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像は、宝冠弥勒ともいわれ、韓国国宝78号との類似

が指摘されます。弥勒菩薩は、釈迦入滅の 56 億 7 千万年後に現われて、衆生を救済するとして信仰されました。

宮城県美術館での展示は、「東日本大震災復興祈念 奈良中宮寺の国宝展」で、会場出口の少し前のヤマ場の位置に、周囲を回れるように展示されていて、感動しました。折しも、コロナ禍が襲って、マスクをして並んで見学しました（2020 年 11 月～2021 年 1 月）。当時、博物館や美術館は、「不要不急」かどうかというような議論もあった頃です。ここを癒す展示で、博物館・美術館が不要不急などとは、とんでもないとの感想を持ちました。皆さんは、どのように思われますか？

中宮寺には飛鳥時代の国宝が 2 点あって、もう 1 点は聖徳太子ゆかりといわれる「天寿国繡帳」です。こちらは本物が、今年の当館春季特別展「東日本大震災復興祈念 悠久の絆 奈良・東北のみほとけ展」にて出陳いただけました（後期展示）ので、ご覧になった方もいらっしゃると思います。この繡帳の下絵は、渡来系の画家が制作したとされます。中宮寺は、斑鳩の法隆寺の東側にあります。

## ヤマト国家（倭）から近世まで

古代日本の発展に、韓半島からの渡来人が絶大な役割を果たしたのは周知のことですが、「歴史認識」問題が入ってきますと、古代史の叙述は複雑になってきます。講座では、スライドで代表的な事例を考えてみました。高句麗の、広開土王碑（好太王碑、中国吉林省集安市）改ざん説、「任那」（みまな）実在問題、「任那日本府」の歴史的評価と史料、伽耶・加羅、韓半島南西部の前方後円墳の考古学的解釈、その他を考えてみました。学校の教科書の古代地図にさえも、両国での認識の違いがはっきり表われています。

古代から中世、近世まで、同種の歴史認識問題は、ずっと影を落とします。豊臣秀吉の対朝鮮戦争は、「文禄・慶長の役」（1592～1598）と言われますが、「朝鮮出兵」「唐入り」「高麗陣」「征韓」「朝鮮征伐」など多くの言い方があり、それぞれに歴史観を表現することになります。韓国では、「壬辰・丁酉の倭乱」と言われますが、たとえばNHK大河ドラマで、この戦争がどのように描かれてきたか、気にしてみたいところです。

また、「朝鮮通信使」の使節は、どのくらい一般によく知られているのでしょうか。江戸時代になって早くも、慶長 12（1607）年から将軍代替わりなどの機会に、12 回の多きにわたって、300～500 人の使節がやってきました。庶民にも大きな関心もたれていた実情を考えてみましょう。（スライド）。

## おわりに

講座では、石器時代から現代まで、いろいろな歴史上の事例を選択して取り上げながら、両国間で相互理解を進めることがいかに難しいかという課題を掘り下げてみました。上述の安重根義士記念館での展示内容の詳しいご紹介はその一例です。今回「読む館長講座」では、歴史認識問題の深層に踏み込むことを差し控えました。

改めて相互の「歴史認識」を問い直すことが重要です。歴史的に、何が起きたのか、歴史資料、歴史史料を、実証的な眼で、双方から見ていくべきです。現在の価値基準を、過去に投影することばかりでは、相互の理解は深まりません。なんととっても、このスライドのように（菩薩半跏思惟像 2 点）、二つの国は永遠の隣人なのです。

ちなみに、ネット上での言説空間を覗いてみますと、実に多くの両国関係をめぐる議論があります。そして中には、政治的言説にベールをかぶせたような論もありません。匿名的に「ヘイト」の感情を刺激するような投稿も見えます。近代、現代に限らず、古代史の昔に遡る言説でも、歴史的事実の集合全体から、かなり恣意的に選んで巧妙に組み立てたと思えるものもあります。さて今回は、博物館のメンテナンス期間を挟みますので、1月27日となります。「北米先住民と開拓者の文化財保護」と題してお話する予定です。このテーマも対立する歴史認識に関わるものです。また、東北歴史博物館講堂にて、皆さんをお待ちしております。

ご清聴まことに有難うございました（お読みいただき、有難うございました）。  
（本稿は、講演レジュメに補足したものです。）

## 参考文献

- 阿子島香（2009）「第 9 章 使用痕分析と実験考古学」、泉拓良・上原真人編著『考古学—その方法と現状—』169—184 頁、放送大学教育振興会（放送大学印刷教材の市販本）。
- 阿子島香・洪惠媛・禹鍾允・李隆助（2022）「付編：韓国スヤンゲ遺跡スンベチルゲの機能と後期旧石器時代前半期」『東北歴史博物館研究紀要』23、13—20 頁。
- 李起吉（2014）「日本東北地域出土のスンベチルゲ（剥片尖頭器）の研究—製作技法、型式、大きさ、年代を中心に—」『Bulletin of the Tohoku University Museum』第 13 巻 1—11 頁。